

# 婦人科癌の化学療法を受け脱毛を経験した若年成人女性の受容過程について

キーワード：化学療法、若年成人、ボディイメージ

後藤苑慶

## Iはじめに

国内で若年患者の癌罹患率は、全ての癌患者の2%<sup>1)</sup>である。若年成人患者は、学校生活や就職、結婚、妊娠などの多くのライフイベントを通過する時期である。さらに、化学療法を受けることで、10代、20代は特に学業と並行していかなければならず、学業が中断されるといった様々な課題を抱えている。化学療法の副作用では、脱毛が高頻度で出現する。若年成人者は容姿・容態に敏感な時期であり、他者と比較しやすい時期である。化学療法を受け、実際に学校へ行き、友人たちと会うことは、脱毛した自分を見られたくないという思いがあるのではないかと考える。そこで化学療法を受けるにあたり、脱毛によるボディイメージの変容の受容過程を知りたいと思い研究に取り組むこととした。

## II. 研究の目的

本研究では、若年成人の女性を対象に化学療法を受け、脱毛によるボディイメージの変化に伴う受容過程を明らかにすることを目的とし、今後の看護に繋げていく。

## III. 用語の定義

若年女性：15歳から30歳未満の女性

ボディイメージ：人が自分自身について持っている心像

境界悪性卵巣腫瘍：良性と悪性の中間に位置づけられる腫瘍のこと

## IV倫理的配慮

研究への参加は自由であり、得られたデータは、個人が特定されないように匿名化することを口頭と文書で説明し同意を得た。また、

倫理審査委員会による倫理審査を受け承認を得た。

## V. 研究方法

### 1. 研究デザイン

事例研究

### 2. 研究期間

2020年9月～11月

### 3. 対象者

婦人科癌の手術を行い、補助療法を受けている若年成人患者の女性

### 4. データ収集方法

約30分程度のインタビューを実施。内容はICレコーダーへ録音した。

### 5. 分析方法

面接から得たデータを基に逐語化した。結果を脱毛に対する受け止めの変化として〈拒否〉、〈混乱〉、〈現実へ直面〉、〈仲間との繋がり〉、〈将来への展望〉へと分類し、カテゴリー化した。

## VI. 事例紹介

A氏、19歳、女性、大学生。キーパーソンは母親。4月4日、術中迅速の結果にて境界悪性卵巣腫瘍であったため、右付属器と左卵巣腫瘍摘出術を施行した。5個の卵子は他病院へ凍結している。5月27日TC療法を開始した。

## VII. 結果

コードを「」サブカテゴリーを〈〉で示す。

TC1 コース目の入院前日に母親から本人が明日のTC療法に対して不安があり、号泣していると入電があった。大部屋の予定であったが、母親同伴の元、個室への入室となっ

た。入院日に A 氏を受け持った際、時折笑顔は見られていたが、「大丈夫です」と返答するだけであった。母親が詳細に昨日の状況を話した。A 氏の病室には、友人からもらった色紙、友人と一緒に撮った写真とクマのぬいぐるみが側に置かれてあった。これらは、毎回持参していた。

TC2 コース目は「副作用は脱毛だけです」と明るく発言していた。1 コース目と比べると表情は穏やかになっており、落ち着いている印象であった。

TC4 コース目から外来へ移行し、インタビューは TC5 コース目の時に実施した。インタビューの内容は別紙参照。

①癌発覚から化学療法を受けるまででは、〈拒否〉、〈混乱〉が抽出された。

「セカンドオピニオンまでしたけど自分が癌なのか実感もなくされるがまま検査をしていった。」しかし、「手術の説明や日程を決めだした時から自分は癌なのだとと思った。」自身が癌患者という認識はなかった。境界悪性腫瘍であり、補助療法が必要となり、説明を受けたが、「手術で終わりだと思っていた。」「意地でも絶対にしないって思った。」という思いがあり、治療を拒否していた。治療方針が定まり、副作用の説明を受けた時は、脱毛を経験したくないと化学療法を拒んでいた。当時のこと、「最初は、脱毛が嫌だった。」「部活をしてて、短いのがやっと伸びかけて結べるようになったのに、それを一から伸ばさないといけない。成人式もあるから脱毛になるのは嫌でした。」と振り返っている。「家族や友達と話して抗がん剤治療はしたほうがいいのかなって思いになった。」「最初は嫌々で始めた。」〈混乱〉した中で、周囲からの説得もあり、当初は渋々化学療法を同意した状態であった。

②化学療法を受けてからでは、〈現実への直面〉、〈仲間との繋がり〉、〈将来への展望〉が抽出された。

抗がん剤が開始し脱毛が進むと、「抗がん剤治療をする前は、ちょっと近くのコンビニに行くこともできたけど、ウィッグを被るのがめんどうで外出するのをやめた。」「友達と遊ぶ場所が限られ、遊園地とか行けない。」「ちょっと抜け出した時は、キャップを被ればどうにかなっていた。」「2 コース目の直前に、脱毛が進んで、髪の毛の量がウィッグを被らないと目立ってきた。その時は、オンラインの授業も受けたくなかった」〈現実への直面〉するようになる。

しかし、脱毛を経験した後は、「友達に化学療法を経験している子がいて、脱毛が嫌になる時とかは、友達に相談して気持ちを落ち着かせていました。」〈仲間との繋がり〉があることがわかり、最後には、「この病気になって看護師になりたいと思い大学を辞めました。」と病気を糧に〈将来への展望〉を抱き、新たな人生を歩もうとしている。

#### VII. 考察

卵巣癌の化学療法は、約 6 カ月の期間を要するため、脱毛の出現時期や対策について事前に説明をしている。A 氏は、元々脱毛が嫌で、化学療法を〈拒否〉し、〈混乱〉した中で周囲からの説得もあり渋々導入した。さらに、2 コース目の時に脱毛の出現があったが、その時は、特に思いの表出はなかった。しかし、振り返る中で、A 氏はその時が一番辛かったと述べている。患者にとって身近な存在である看護師は、患者が脱毛に対してどのように受け止めようとしているか思いの表出ができるよう環境作りをし、側に寄り添っていく必要がある。また、婦人科癌の化学療法患者は、治療終了後、15 日経過した時に外来へ採血に来る。その際、化学療法の副作用の確認は行うが、患者の思いは十分に聞くことができていなかった。A 氏からの思いの表出はなく、A 氏の化学療法の導入までの背景を考えると、治療経過に応じて、治療や脱毛の受容に変化があるか入院・外来と連携して介入が必要である。

〈現実へ直面〉した後でも A 氏が脱毛、治療を乗り越えることができたのは、〈仲間との繋がり〉や家族、ぬいぐるみなどの存在があったからだと考える。A 氏は未成年であり、外来の通院や入院時は母親が同伴していた。A 氏は口数が少なく、医療者から問い合わせない限り自ら発言することではなく、母親が代弁していた。闘病中、常に母親が側で見守り、励ましたことやぬいぐるみという存在も自分にとって落ちるつくるものが近くにあったから A 氏は治療を乗り越えることができたのではないかと考える。このことから、若年成人患者は、家族や心の支えになる物を側に置き、安心・安楽に治療を受けられるように環境調整が必要である。

また、宮城島らの研究では、生活と心理面の両方に影響を与えていたのは、経験者の支えがあつたこと<sup>2)</sup>を明らかにしている。家族と一緒にいる時は、口数が少なく医療者への表出がなかつたため、A 氏の思いが表出できるように個別で対応をしたが、全てを医療者へ伝えるのは難しかつたと思われる。〈仲間との繋がり〉は、同じ境遇者として、思いを共有しやすく、治療の今後の予測もできる。また、癌経験者や家族が交流できる患者会といのも存在しているため、情報提供をすることで、患者が自分の胸の内を表出でき、闘病仲間やその家族との繋がる場があるので、治療へ繋げられると考える。

今泉ら<sup>3)</sup>は、脱毛を体験した自分を悲しみつつも最終的には病気を自分のものにし、前向きに歩み出していく過程を明らかにしている。A 氏も同様に、〈現実へ直面〉後も友人へ相談し徐々に受け入れている。変えられない現実へ目を向け、最終的には看護師を目指し、〈将来への展望〉を抱いていることを知った。A 氏は、「成人式もあるから脱毛は嫌でした。」と述べているように、若年成人患者の場合は、ライフイベントが重なっている。年齢に応じてライフイベントとの折り合いをつけていくように支援が必要である。

## IX. 結論

1. 本研究における若年成人女性患者は、思いの表出が少なく、〈拒否〉、〈混乱〉した中で周囲からの説得があり済々化学療法を開始した。患者が脱毛や治療に対してどのように受容しているか入院・外来が連携し継続看護をしていく必要がある。
2. 若年成人女性患者は、本人の受容過程を把握しつつライフイベントに沿っての介入が必要である。
3. 本研究における若年成人女性患者が脱毛や治療を乗り越えることができたのは、キーパーソンの母親や〈仲間との繋がり〉、患者にとって安心できるぬいぐるみなどの存在があつたからである。
4. 徐々に脱毛を受容し、最終的には、病気を糧に〈将来への展望〉を抱き新たな道へ歩み出していく過程が明らかになった。

## X. おわりに

本研究では、症例数が 1 事例と少ないため、今回の結論を一般化することは難しく、限界がある。しかし、脱毛を経験した若年成人女性の受容過程や必要な看護介入を知ることができた。今後も若年成人患者と関わる機会があるため、患者の受容過程に応じて介入をしていきたい。

## XI. 引用文献

- 1) 広島大学病院：AYA 世代がん (<https://www.hiroshima-u.ac.jp/hosp/cancer/aya>)
- 2) 宮城島恭子、大見サキエら：小児がん経験者が病気をもつ自分と向き合うプロセス—思春期から成人期にかけて病気を自身の生活と心理面に引き受けていくことに着目して—、日本看護研究会雑誌 Vol. 40、No. 5、747–757、2017
- 3) 今泉郷子、村山康子ら：化学療法を受ける女性生殖器がん患者の脱毛に対する受け止め方の変化、川崎市立看護短期大学紀要、7 (1)、71–76、2002–2003

〈インタビュー内容〉

- ・卵巣癌と聞きどう思ったか、
- ・化学療法をすると聞きどう思ったか。
- ・化学療法を受け、心境の変化はあったか。
- ・脱毛し、日常の変化はあったか。
- ・脱毛をどのように受け止め、対処したか。

〈インタビュー結果〉

	サブカテゴリー	コード
癌発覚から化学療法を受けるまで	拒否	<ul style="list-style-type: none"> <li>・セカンドオピニオンまでしたけど自分が癌なんか実感もなくされるがまま検査をしていった。</li> <li>・手術の説明や日程を決めだした時から自分は癌なのだとと思った。</li> <li>・手術で終わりだと思っていた。</li> <li>・(化学療法) 意地でも絶対しないって思った。</li> </ul>
	混乱	<ul style="list-style-type: none"> <li>・最初は、脱毛が一番嫌だった。</li> <li>・部活をしてて、短いのがやっと伸びかけて結べるようになったのに、それを一から伸ばさないといけない。成人式もあるから脱毛になるのは嫌でした。</li> <li>・最初は嫌々で始めた</li> </ul>
化学療法を受けたから	現実へ直面	<ul style="list-style-type: none"> <li>・抗がん剤治療をする前は、ちょっと近くのコンビニに行くこともできたけど、ウィッグをかぶるのが面倒で外出するのをやめた</li> <li>・友達と遊ぶ場所が限られ、遊園地とかに行けない。</li> <li>・ちょっと抜け出した時は、キャップをかぶればどうにかなっていた</li> <li>・2コース目の直前に、脱毛が進んで、ウィッグを被らないと目立ってきた。その時はオンラインの授業でも嫌だった。</li> </ul>
	仲間との繋がり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・脱毛がたまに嫌になるけどその時は、友達に相談して気持ちを落ち着かせていました。</li> </ul>
	将来への展望	<ul style="list-style-type: none"> <li>・この病気になって看護師になりたいと思い大学を辞めました。</li> </ul>